ジャン＝フィリップ・メルカールト
Jean-Philippe Merckaert

ベルギー生まれ。パリ国立高等音楽院でオルガンをオリヴィエ・ラトリー、ミシェル・ブヴァールに師事し、2005 年プルミエ・プリを得て卒業。ベルギーではブリュッセルのベルギー王立音楽院にてジャン・フェラーにオルガンを師事し、2008 年修士号を取得。モンス王立音楽院にてクラシック作曲法を学び、2007 年修士号を取得。2007 年、フライベルクにおけるジルバーマン
国際オルガンコンクール第 2 位、2009 年、ブルージュ国際古楽コンクールオルガン部門第 2 位受賞。
2003 年から 1 年間札幌コンサートホール Kitara 専属オルガニスト、2011 ～ 14 年まで所沢市民文化センター ミューズ ホールオルガニストを務めた。現在、東京芸術劇場オルガニスト、那須野が原ハーモニーホールオルガニスト、聖グレゴリオの家宗教音楽研究所講師､片倉キリストの教会オルガン教室講師。近年、オーケストラ曲の編曲にも力を入れており、様々な演奏会で好評を得ている。CD は「ヨハン・ゼバスティアン・バッハ ライプツィヒ手稿からのコラール集（2 枚組）」（スイス）、「フランク、ドビュッシー、サン＝サーンス オルガン編曲集」（パリ）、「シャルル＝マリー･ヴィドール　オルガン交響曲　第 5 番」（那須野が原ハーモニーホール）をリリース。

〈 オルガンのご案内 〉

初設置： 1999年12月 2013年 新会堂に移設
設計・製作・組立： Werner Bosch Orgelbau GmbH
整音・調律： Michael Bosch
ディスポジション： 秋元道雄
鍵盤：３段手鍵盤と足鍵盤 ストップ数：45

〈 富士見町教会のご紹介 〉

富士見町教会は１８８７（明治２０）年、
植村正久により創立されました。
日本基督教団に属する、プロテスタントの
キリスト教会です。

■主任牧師　藤盛 勇紀
■牧師　　星野 江理香
■牧師　　小宮 一文

東京都千代田区富士見2-10-1
TEL 03-3261-0633
http:://www.fujimicyo-kyokai.org

〈 集会のご案内 〉

主日礼拝	朝礼拝	午前10時20分～12時
	夕礼拝	午後6時～7時
昼礼拝	火曜日	午後0時30分～1時
教会学校	日曜日	午前9時～10時
キリスト教入門講座「志道者会」		
	日曜日	午前9時～10時
	水曜日	午後6時30分～7時30分
祈祷会	木曜日	午後6時30分～7時30分

イースターは、十字架につけられたお方、イエスの復活を記念する時です。
イエス・キリストの死と復活を信じる人は、キリストと共に死んで、キリストと共に復活させられた「新しい人」。
死は破られて、新しい命に与ったイースターの喜びを、一人でも多くの方々と共に味わいたいと願います。

富士見町教会 牧師　藤盛勇紀

富士見町教会
イースター・オルガン演奏会
Easter Organ Concert

演奏
ジャン＝フィリップ・メルカールト
Jean-Philippe Merckaert

2025年 4月 19日（土）
14:00 開演（13:30 開場）
入場無料　自由献金

富士見町教会　大礼拝堂

Program

ディートリヒ・ブクステフーデ
Dietrich BUXTEHUDE (c. 1637-1707)

プレリューディウム　嬰へ短調
Praeludium in fis, BuxWV 146

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ
Johann Sebastian BACH (1685-1750)

われらに救いを賜うキリストは
Christus, der uns selig macht, BWV 620

イエス十字架につけられたまいし時
Da Jesus an dem Kreuze stund, BWV 621

おお人よ、汝の大いなる罪を嘆け
O Mensch, bewein dein Sünde groß, BWV 622

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus MOZART (1756-1791)

アダージョとフーガ　ハ短調
Adagio et Fugue en ut mineur, KV. 546
（編曲：ジャン・ギユー）

― 休憩 ―

― メッセージ ―
富士見町教会主任牧師　藤盛勇紀

― ご一緒に歌いましょう ―
讃美歌 21 317 番　主はわが罪ゆえ（1～5 節まで）

シャルル＝マリー・ヴィドール
Charles-Marie WIDOR (1844-1937)

オルガン交響曲《ロマネスク》
Symphonie Romane, op. 73

モデラート	Moderato
コラール	Choral
カンティレーヌ	Cantilène
フィナル	Final

Program Note

D. ブクステフーデ：プレリューディウム　嬰へ短調 BuxWV 146

ブクステフーデが活躍したリューベックという都市を含む北ドイツ地域は、中世以来ハンザ同盟で栄え、文化・芸術の交流も盛んであった。そのため、オルガン音楽もブクステフーデを頂点とする北ドイツ・オルガン楽派の活躍によって華やかに展開していった。「プレリューディウム　嬰へ短調」は、私たちが知る限り、この調で書かれた最初のオルガン曲である。それまでこの調性は、リュートやチェンバロのための作品（フローベルガーやルイ・クープランなど）に見られたが、オルガンでは全く新しい作品である。嬰へ短調の音色は、17 世紀のフランスの音楽家たちが“ヤギの旋法 ton de la chèvre”と呼んだもので、痛々しい印象を与えるものである。このプレリューディウムは、ブクステフーデの傑作のひとつであり、“幻想様式 Stylus phantasticus”の完璧な例である。非常に対照的な、情感を持つ自由で即興的な部分と 2 つのフーガで構成されている。最初のフーガは堂々としていて深い憂鬱さがあり、2 番目のフーガは表現がより軽く、対位法的に自由なものとなっている。

J. S. バッハ：『オルガン小曲集』より BWV 620、621、622

おそらく 1708 年に、バッハは新たなオルガン・コラール集の作成を初めた。当時、中部ドイツには、教育と実用のための大規模なコラール曲集がいくつかあった。バッハは 164 曲のコラール作品を収めるスペースを設けることからこの計画を開始し、最終的に 45 曲を完成させた。バッハ自身が『オルガン小曲集 Orgelbüchlein』と名づけたこの曲集の前半は、待降節から始まり、三位一体や特別な祝日で終わる教会暦の一般的なコラールの順序に従っており、後半は特定の祝日にとらわれない内容のコラールとなっている。
本日は受難節のための三部作をお聴きいただく。BWV 620 は聖書におけるキリストがユダの裏切りによって捕われた場面を描いたものである。バッハはこのコラールをカノン（法の象徴）として扱っており、不協和音の厳しい響きが痛みを表現している。『ヨハネ受難曲』の第二部冒頭を飾るのは、このコラール旋律である。BWV 621 は、十字架上のキリストの最後の 7 つの言葉を音楽で表現している。BWV 622 は、バッハのオルガン作品の中でも最も美しい作品の一つで、装飾されたコラール旋律がソプラノ声部に置かれた“装飾コラール”と呼ばれる形式をとっている。このコラールは、人間の罪の贖いのために神から遣わされたキリストのこの世での生涯が描かれている。バッハはこのコラールを『マタイ受難曲』の第一部の最後に合唱で歌うものとして用いている。

W. A. モーツァルト：アダージョとフーガ　ハ短調　KV 546

1783 年、モーツァルトはこの作品の「フーガ」をまず 2 台のピアノのために作曲し、さらにその 5 年後に「フーガ」の前奏となる「アダージョ」を追加して弦楽四重奏の作品とした。当時、モーツァルトはバッハのフーガに熱中していた。それらの研究は、モーツァルトにとって難解であると同時に喜びでもあった。なぜなら、彼の時代の様式に合わせた上で、完璧な作品を書こうとする試みを積み重ねていくことであるからだ。最終的にそれを達成した成果として、本日演奏する作品や、同じ 1788 年に作曲された『ジュピター交響曲』の終楽章の 5 部フーガのような並外れた傑作が私達に残されたのである。本日は、フランスのオルガニストで大変なヴィルトゥオーソとして知られていたジャン・ギユー（1930-2019）の編曲をお聴きいただく。

C.-M. ヴィドール：ロマネスク交響曲　op. 73

フランスのリヨンに生まれたヴィドールは、最初の音楽教育を父から受けた。偉大なオルガン製作者アリスティド・カヴァイエ＝コルの勧めにより、ベルギーのブリュッセルでオルガンをジャック＝ニコラ・レメンス、作曲をフランソワ＝ジョゼフ・フェティスのもとで学んだ。そして、早くも 26 歳にしてパリ、サン＝シュルピス教会のオルガニストに就任した。この教会は、カヴァイエ＝コルが製作した楽器の中でも名作の一つに数えられる大規模なオルガンを備え、この素晴らしい楽器からヴィドールは 10 曲の『オルガン交響曲』を作曲した。作曲家としては他に、オーケストラや室内楽、合唱、バレエ音楽、オペラといった非常に幅広いジャンルの作曲を手がけたが、現在ではこの『オルガン交響曲』の作曲で最も知られている。
ヴィドールの最初の 8 つのオルガン交響曲は演奏会用作品であり、非常に古典的なロマン派作品から、ワーグナーに近い、より濃密で半音階的な表現への進化を見ることができる。これらの後に書かれた 2 つの交響曲は、グレゴリオ聖歌に基づいており、したがって教会向けに意図されている点で、以前の 8 つの交響曲とは一線を画している。この 2 作品のうち最初の『ゴシック交響曲』（1895 年）は、クリスマスの入祭唱「幼子が生まれた Puer natus est」に基づいており、2 番目の『ロマネスク交響曲』（1899 年）は、復活祭の昇階唱「今日こそ主の御業の日 Hæc dies」に基づいている。
『ロマネスク交響曲』の序文で、ヴィドールはこのグレゴリオ聖歌の旋律を「優雅なアラベスク」と表現し、2 つの方法で活用していると述べている。1 つ目はリズムの自由を尊重する方法、2 つ目は逆に主題をメトロノームのテンポに従わせる方法である。第 1 楽章「モデラート」では、流麗さを保ちながら主題が何度も繰り返され、第 2 楽章「コラール」では、主題が落ち着いた壮大さでハーモニーを形作る。第 3 楽章「カンティレーヌ」では、「今日こそ主の御業の日」の聖歌に加えて、復活祭のセクエンツィア（続唱）「過ぎ越しのいけにえをほめ称えよ Victimæ paschali laudes」も聴くことができる。終楽章「フィナル」は高度に発展したトッカータで、ヴィドールが書いた中でも最も深遠な曲の一つである。オルガンのトゥッティによる壮大なクライマックスの後、第 1 楽章冒頭のモチーフを呼び戻すデクレッシェンドがあり、静謐なコーダへと向かう。

「今日こそ主の御業の日、今日を喜び祝い、喜び踊ろう。アレルヤ」

ジャン＝フィリップ・メルカールト